

十月七日、天津英租界黃家花園に李氏を訪ひ、手輕にこの景典を手交されて、始めて年來の渴望を醫するを得た。更ためて言ふまでもなく、この一卷はこれと同時に李氏の示された道德經注百三十漢書存匡傳より孔光傳唐律行八十等の斷簡を始め、その他多數の貴重なる遺籍と共に、例の敦煌の石室から出たもので、李氏はこれ等の蒐集の爲に、特に人を敦煌に派したのだと説明せられた。さて一應閲覽した後に偶然北平より同行した杉村勇造氏の助を受けて、卽座に全卷百五十九行を抄了することを得た。李氏は、更にこれを寫眞することをも快諾されたのであつたが、不幸にしてその日の午後から自分が俄に病氣に罹つた爲、遂にその機會を失つたのは遺憾に堪えぬ。かゝる次第でこの一卷は急速の間に抄寫し、原本と對校する暇も無かつたので、魯魚の誤の存するもの二三に止まらぬであらうと思ふが、然も大體に於て謬る所無きは固より信じて疑はない。精しくは、他日原本に就きて校合すべきである。

この經の題名に就いては、上海商務印書館發行の東方文庫第七十一種考古學零簡中に收めた抗父氏の最近二十二年中國舊學之進歩といふ篇中に、正しく志玄安樂經と記されてあるが、面白いことには此の經題は有名なる大秦景教三威蒙度讚の末に附した尊經と題する經目中に見えて居り、羅振玉氏がそれを敦煌石室遺書の中に收めて刊行した所に據ると、志元安樂經と記されて居る。それで前に序聽迷詩所經を解説した時に、三威蒙度讚の寫眞を見るを得なかつた自分は、羅氏に従つて玄を元と書いて置いたのであつたが、今この經を見れば、その首尾に於て共に志玄安樂經と記されて居り、三威蒙度讚の寫眞にも同一文字で記されて居る。羅氏の元字を用ゐたのはいふまでもなく玄字を諱んで代へたのに外ならなかつたのである。